第一章

大和テンゾウの、入学以来保ってきた学校モテ男ナンバーワンの地位は、高3の春に突然終わった。代わってナンバーワンに躍り出たのは、その春に着任したばかりの新人教師、畑カカシ。

情報の速さは世界最速と思える女子達によると、少し毛先が跳ねたような髪はワックスなどつけておらず、天然のくせ毛。長めなのは、本人いわく頭の形に自信がないから。細身だけど、実はシックスバックに腹筋は割れている。

そんな情報は知らなくても、見た目にまず目にく肌の白さ。それと対比する様に薄桃色に色づいた唇は、まるで口紅を塗ったよう。

整ったいわゆるイケメンの顔立ちなのだが、精神というより穏やかな優しい雰囲気を感じている。

この、現代的なモテ要素をすべて備えた新人教師を始業式で見た女子達は、すでにざわざわと落ち

赦しの船、風のオール

東の地平

着かなくなっていた。ましてや自分たちの副担任になると知ったテンゾウのクラスの女子達は、皆それぞれやった、副担の枠が空いていて良かったとガッツポーズまでしている。

テンゾウのクラスは、より難易度の高い特進クラスで学年で1クラスのみ。

当然3年間クラス替えなく、担任も一緒だったが、副担任は女性教師で高2の2月に産休に入ったばかりだった。その際は女性教師との別れを惜しみ、元気な赤ちゃんを産んでねという寄せ書きを渡す時は涙ぐんでいたクラス女子達の変わり身の早さを、男子達は冷ややかに見ていた。

しかし畑カカシは、普通なら反感を買ってしまったような男子生徒の心もすぐに掴み、けして悪い印象を与えることはなかった。

元々進学校で素行の悪い生徒はいない分、頭はいが若干ひねくれた生徒もいて、時に教師を困らせ

るような質問をする者もいる。

畑カカシの教科は英語だったが、帰国子女も多い私学の進学校の生徒達も納得の *nature English*。

大学時代に海外留学の経験があるというのは、女子の情報網。

知識は完ぺきなのに、どこか天然で例えばクラス名簿を間違って持ってきたりする。

出席を取りかけて、それ隣のクラスです、と誰かが指摘すると、「ごめんね」と、微かに小首を傾げて人を惹き付ける笑顔で素直に謝る。女子からは一斉に可愛いという声上がり、男子生徒達ですら、しょうがないなど、その天然さに和やかな雰囲気になる。

頭も顔もよくて少し天然なお兄さんは、瞬く間に生徒の人気を攫った。

第二章

5月、中間テスト後の授業はどの教科もテスト返却。中でも特進クラスのテンゾウ達にとつて、3年の試験はどれもが真剣勝負。

英語も答案が返却されたが、ある生徒から採点が間違っているという声が上がった。

カカシはいつものように素直に非を認めて生徒に謝り、他の皆ももう一度見直して、間違いが見つかったら授業の終わりに答案用紙を提出してくださいと告げた。

テンゾウもちろん確認したが、特に正解なのに×をつけられているということはない。しかし思ったよりも点数が低く若干落ち込んでいた。英語は得意な教科なのだ。これで点数稼がないといけないのに、とがっかりする。

授業終わりに友人のサイが答案を再提出していたことに、テンゾウは気づいた。

「何、お前も何か間違いあったの？」

休み時間となりテンゾウのそばへ来たサイに尋ねる。

「うん、採点じゃなくて合計点がね、合ってなかった。2点損するところだったよ」

「合計点？」

「お前もちゃんと見た方がいいぜ。あの先生、英語は得意でも数学は駄目なのかもな」

「数学って、ただの足し算なのに教師が間違えるか……」

しかし気になり、テンゾウも自分の解答题紙の設問ごとの合計点を足していく。すると3点の違いが見つかった。

「僕も違う！」

「言に行けよ」

「もちろん。行ってくる」

カカシはもう教室にはいなかった。職員室まで行

かなければならないが、88点と91点は受験生にとつて大きく違う。

職員室で自分の机にいるカカシを見つける。右手は顎をのせて片肘を付き、左手で自分の髪を弄っている。まるで授業中にやる気のない生徒のようで、テンゾウは少し意外に思う。

まあ、自分の席だからリラックスしているんだろう。

「カカシ先生」

話しかけるとさつと態度を変えていつもの笑顔を見せた。

「うん、何？」

「僕の分も、合計点が違っていると思います」

「あ、そう？ごめんね」

カカシはテンゾウの解答题紙をあつさり受け取る。

最初80点台かと焦ったこともあり、テンゾウは

その軽さに少し腹が立った。

「あのさ、カカシ先生。僕達受験生には1点2点でも貴重なんだから、ちよつと気を付けてくださいよ。間違いがクラスで数人もいるのは多すぎない？」

「ばかばかしい……」

「え？」

テンゾウは一瞬耳を疑う。あのいつもアイドルのような笑顔で愛想のいいカカシ先生が今なんて？

「今、ばかばかしいって言った？先生」

「ん？言っていないよ」

顔をテンゾウに向けたカカシはいつもの穏やかな笑みを浮かべている。

「言っただろう？ばかばかしいって」

「ああ、違うよ。計算間違ったから、自分のことをバカだなんて言ったんだよ」

カカシはテンゾウに向けていた身体の向きを、椅子ごと動かし机正面に向ける。

「じゃ、ちゃんと点数直しておくから」

一方的に話は切られた。

「…お願いします…」

若干の腑に落ちない気分を引きずりながら、テンゾウは職員室を出た。

ドアのところでもう一度カカシの方を振り返ると、再提出した答案に目もくれず、再び片肘をついてやる気なさそうな態度をしている。

なんだ、あの先生…。

それまでカカシの存在は、勝手にモテ男対決のライバルとか同級生に揶揄されることもあったが、男のテンゾウにとって、教科ごとの先生という以外に特別な意識は持っていなかった。

第一、高2までモテ男ナンバーワンだったと言われても、別に全生徒にアンケートとったわけでもなく、多少周囲の女子達に人気があったのを、同級生達が面白半分もあって言っているだけと、そのあた

りは冷静に捉えている。

その点、カカシの人氣は本物だ。

爽やかで、穏やかな笑顔が素敵なイケメン先生。

あれは…。

テンゾウはテストの誤採点があつてから、むしろカカシの事が気になりました。

第三章

6月、遠足があつた。修学旅行は2年の11月に既に行つている。学校全体ではまだ秋に体育祭と文化祭を控えてはいるが、3年単独ではこれが遊び的な要素のある行事としては最後。

朝、クラスごとにバスに乗り込む。入口のところ
でバスガイドさんと担任の先生が出迎えてくれている。しかしカカシの姿は見当たらない。他のクラスは担任と副担任二人並んでいるのに。

「えー、副担任のカカシ先生は、風邪をひかれた
ということでお休みです」

えーっ!! いやーっ!!

担任のイルカ先生が全員乗り込んだバスの先頭
に立ち皆に告げると、一斉に女子達から悲鳴に近い
声が上がった。

「がっかりー」

「クツキー作ってきたのに」

クラス女子が口々に残念がる。

「クツキーなら俺が食つてやるぜ」

「あんたにあげるくらいなら、あんたのペットの赤丸にあげるわよ」

クラスのひょうきんもの、大塚キバと幼馴染だといふハキハキしたテンテンの会話に笑いが起きて、その話題はようやく終わりとなる。

ほんとに風邪か? さぼりじゃないだろうな…。

テンゾウはテストの誤採点以来、どうもカカシに対して、爽やかな外見で皆から好かれる良き先生というイメージは違うんじゃないかという疑念を持つている。

しかしまさか教師が遠足のさぼりなんてあるわけないとすぐに打ち消した。

女子生徒から手作りおやつ持つていくね、なんて話しかけられて楽しみだと笑顔を見せていたカカシはこの春に教師になったばかり。仕事として初め

ての遠足をさぼるなんてさすがにないだろう。

女子達はカカシがない事に残念がつてはいたものの、最後の遠足となるバーベキューはそれなりに盛り上がった。

遠足後に打ち上げと称して都心まで繰り出し、楽しい気分之余韻をクラスメートとカラオケで味わう。

カラオケ店を出た頃は夜の8時くらい。テンゾウはすぐに駅に向かう友人たちと店の前で別れた。

この都心にある大きな書店は10時頃まで開いている。郊外にある家の近くのごく一般的な書店にはない豊富な量の参考書が揃っており、テンゾウはそれが見たかったのだ。

自分でも遊びに来た日に参考書探さなくてもと思ったが、きつと家に帰ってからやっぱり行けばよかったと後悔すると思いい直した。

受験生仲間とはいえ遠足帰りに参考書買いに行

くとはちよつと言いつらく、友人には用がると言つて別れた。

道路沿いを歩きながら、通りの向こう側に目的の書店が見えてきたので何気にそこに目を向ける。すると中からここ最近、急にその動向が気になりだした人物が出てくるのが見えた。

細身のすらつとした体型。アイドルというよりはモデル風の斜に構えた立ち姿で、書店のドアから出たところで横並びに歩く集団が通り過ぎるのを立ち止まって待っている。

毛先の跳ねた髪を右手で無造作にかき上げる仕草は、彼が授業中でも時々見せる癖。

間違いない、あれはカカシ先生。

「マジ？ほんとにさぼりだったのかよ・・・」

風邪で寝込んでいるはずのカカシがどうして書店から出てくるんだと、つい声に出してさぼりかと言ってしまう。

テンゾウは目の前の信号が青に変わると同時に、道路を渡るため小走りになった。

カカシはすでに歩道の中の人混みに紛れて歩き出している。

テンゾウが道路を渡り終えた時には、カカシは先を行きメインの歩道から路地へと右に曲がるころだった。後を追いかけてようとして、そもそも目的は参考書だったと一瞬書店のドアを振り返る。しかし今は参考書より、カカシがさぼったのかどうか確認したい気持ちの方が勝っている。

迷いは瞬時に断ち切り、カカシの後を追う。

見失うことのないように、テンゾウはダツシユでカカシが曲がった路地に入った。

「ひえっ…」

思わず小さな呻きを上げ、ざっと立ち止まる。

「おい、ぶつかったなら謝れって言ってるんだよね」
カカシの前に、いかにもただ今人生で一番イキガ

ツテマスのなチンピラ風の男三人が立っていた。

「兄ちゃん、耳聞こえないのかよ」

カカシはテンゾウの位置からは背中しか見えないが、どうやら謝らずに無言でいるようだ。

な、なんでさつさと謝らないんだよ、だいたいあんなイカニモチンピラが歩いてくるのを見たら、ふう先に避けるだろ…。

テンゾウはハラハラしながらも、もしかして背中しか見えないカカシは怖くて謝ることも出来ないんじゃないかと思う。

そうだ、きつとガタガタ震えて言えないんだ。僕が何とかしてあげなくちゃ…。

本当は自分だって怖くて仕方ないが、カカシに代わって謝り何とかこの場を凌ごうと一歩前に歩みだす。

「うっせーんだよ。お前らがぶつかって来たんだろうが。因縁つけても金なんか持ってねえぞ」

カカシが大声でチンピラに怒鳴り返した。

「なっ…」

何言ってるんだよー！

イキがるのが生きがいのチンピラなんかには逆らうってバカか、あの先生！

テンゾウは突然のカカシの激しい言葉に驚くと同時に、この場がどうなるんだと半ばパニック状態になる。

こうなったら…もうやけくそ。

テンゾウは一瞬に心を決めて前に向かってダッシュした。

「はあっ！？てめえ、何言ってる…おい！！」

チンピラが想像通りの反応している真横を、カカシの手首を掴み走り抜ける。

「早く！！」

急かすため振り返るとカカシが驚いて目を見開いていたが、長々話す暇などなくとにかく腕を引つ

張る。

クラブはバスケなのだが、実は足の速さにはそこそこ自信がある。体育祭でのクラスのリレー代表には中学から毎年、選ばれている。

しかし、チンピラと戦うスキルなんてあるわけない。

そう、走って逃げきるんだ。

「待ちやがれ！！」

待ってって言って待つ奴なんているのかと、刑事ドラマを見て思う事を今も走りながら思う。チンピラに追われて逃げるなんて、数分前まで考えもしていない。救いはカカシが全力疾走している自分のスピードについてこられていた事だった。

繁華街に乱立する雑居ビルが作り出す路地を二、三回曲がって、更に細い路地に入った。

息が続かなくなったところで立ち止まる。路地に入って来た方を振り返るが、チンピラの怒

声も足音も聞こえない。タバコで肺をやられている
だろうチンピラなんか追いつかれるもんかと急
に強気になって、笑顔でカカシを見る。

「はあはあ…もう、もう大丈夫みたい…」

「はあ…あの、これ…」

カカシは視線を今だしっかりと自分の手首を掴
んでいるテンゾウの手の方に向ける。

「あ、ごめん」

テンゾウは慌てて手を離れた。

「でも先生、なんであんな事言ったの？チンピラ相
手に無茶だよ」

カカシは解放された手首をさすりながらテンゾ
ウに向かって言う。

「先生…ってお前俺の学校の生徒？道理で見たこ
とある…」

「！」

テンゾウはさつきカカシがチンピラに激しく言

い返した時より衝撃を受けた。

生徒を覚えてないのか！

「覚えてないんですか？」

「ん？生徒のこと？」

「教師って…生徒を覚えるのも仕事でしょ」

「無茶言うなよ。教科担当は5クラスも持たされて
る。200人もの顔覚えられるか。第一皆同じ服着
てるし」

「同じ服って…制服なんだから当たり前」

マジで何なんだ、この先生。

テンゾウは大きなため息をついた。全力疾走の疲
労が一気に溢れてくる。

「でも教科だけのクラスはともかく、僕は一応カカ
シ先生が副担してる7組にいるんだけど」

カカシがふふっと微笑する。

「うん、思い出した。この前1点、2点が貴重とか
って俺に説教した大和テンゾウ君」

「説教って：僕達にとつては重要な事なのに」

テンゾウの言葉に被せる様にカカシが言う。

「テストの1点、2点で人生変わるみたいに言うなよ。人間、生きてりゃいいんだよ」

テンゾウはその言葉にカチンとくる。誤採点に気を付けてほしいと言った時、ばかばかしいと聞こえたのは間違っていないかった。あれはカカシの本音。

でも教師なら1点、2点も取りこぼし無いようにケアレスミスするとか、注意する側じゃないの？
「僕は間違ったこと言ってます。だいたい遠足さぼるような教師にそんな言い方されたくない」

カチンときた怒りで、カカシにさぼり前提で言い返す。

「さぼりじゃない。イルカ先生に聞かなかった？風邪だよ。こほん、こほん」

嘘っぽい咳の真似をするカカシにテンゾウは苛々が募る。

「ほんと白々しいから。今だって大概全力疾走だったのに、平気そうだし。だいたい風邪で弱ってるよな時、チンピラに言い返したりしないでしよう」
「心外だなあ…。ほんと風邪で調子悪いのに。だからチンピラさんが歩いてくるのに気づかなかったんだよ」

カカシは言いながらポケットから煙草を取り出す。

生徒の目の前で路上喫煙始めるカカシに怒り通り越し、テンゾウは呆れた。

「あのさ、風邪って言い張りながら煙草吸っても、全然信用できないよ」

「これ？煙草じゃないよ」

「ああ：じゃ、禁煙用のダミーみたいなやつ？」

「じゃなくて、大麻」

カカシが何を言ったのかテンゾウは分からない。
「たいま？」

「そう、大麻。俗称ではつばとかみんな言うけど、つまりマリファナ」

「大麻…？マリファナ…？って麻薬の？え…？それって合法だっけ？いや違う…」

カカシの口からみたびの衝撃の言葉が出て、単純に驚いたという感覚を飛び越え、思考回路にトラブル発生したような単語の羅列しか出てこない。

「まあ日本じゃ違法だけど、国によつては煙草より習慣性低いって合法なところもあるんだぜ」

ふーっと煙を吹き出し、カカシが言う。

テンゾウにとつて麻薬などというものは、テレビや映画の世界で見るだけのもの。現実味がない。

「でもそれ…普通の…煙草にしか見えませんか」

「そりゃ、ポリさんに見つからないようにカムフラージュだよ。普通の煙草の箱に入れて煙草と見せかける。でもマリファナ。独特の甘い臭いがするって、聞いたことない？」

「さあ…？」

「ちよつと嗅いでみる。こんな経験したことないだろ？」

「あ、当たり前。そんな麻薬なんて…」

「じゃ、こんな臭いのするモノには近づいちゃいけないって言う危険回避の経験に嗅いでみたら」

カカシがテンゾウに自分の吸いかけの煙草に見えるマリファナを渡す。

「吸わなくていいからさ。ちよつと口にくわえてこようやって手で煙を自分の方へ扇いでみる」

カカシはゼスチャーで手をパタパタさせてみる。

カカシにスマートな仕草で誘導されるままに、テンゾウはマリファナを口にくわえ、煙を自分の方に向ける様に手で扇ぐ。

ん…？独特の甘い臭いって…？別に煙草の臭いにしか感じ取れないけど…。

パシヤリ。

シャッター音が聞こえて、テンゾウは顔を上げた。

「何してるんですか？」

「写真撮った」

「僕の？」

「そう、お前の」

「何で？」

理解不能なカカシの行動を問い詰めている間にも、カカシはスマホの画面を何やら操作している。

「保険だよ」

「保険？」

「そう、こういう写真押さえておくと、お前も俺の

さぼりをイルカ先生にチクれないでしょ」

「は：はあっ！？？どんな写真撮ったんだよ！？」

テンゾウの半ば怒鳴るような声に、カカシはあっさりスマホを差し出しその画面を見せる。そこに

誰がどう見ても煙草を口に咥えているテンゾウが写っていた。

テンゾウは口の煙草を地面に叩きつけるように

捨ててカカシに詰め寄る。

「その画像今すぐ消してください！消せよ！」

「これ消しても、もう俺のパソコンメールに送ったから」

「な、なんでそんな事……」

「だから保険だって。お互いまずいことは黙っておこうね、テンゾウ君」

カカシは、皆からアイドルのようだ、モデルのようだと言われる笑顔を見せる。

人の二面性を扱った小説のジキルとハイドのよ

うな人だと、そのカカシの笑顔を見てテンゾウは思

う。

いや、あの小説は本質が善人のジキル博士だったけど、この人は本質が悪人のハイド氏。

「煙草なんて吸ってないのに……僕は臭いを嗅いだだけで……」

「ああ、そうそう。臭い分かった？」

「分かりません」

「そうだろうねえ。だってただの煙草だもん」

「それも嘘ですか？」

人間て、あまりの怒りを通り越すと無気力になるんだとテンゾウはぼんやりと考える。もう大声で批判する気も起こらない。

「マリファナなんてどうやって手に入れるかも知らない。お前素直だよ。すぐ人の言葉信じてさ」

「人じゃなくて、教師の言葉だからでしょう。生徒なら信じますよ、先生なんだから」

カカシはそれまでずっと小ばかにしたような薄笑いを浮かべていたが、テンゾウの言葉にすつと笑顔は消えて、厳しい表情となった。

「教師だからって…」

テンゾウの教師なのだからその言葉を信じるといふ発言に、カカシが反論する。

「教師だって万能じゃない。勝手に信用するなよ」

「万能なんて思ってもませんよ。でも、生徒に向かって信用するなっていうのも乱暴な言いぐさと思うけど。カカシ先生はそんな考え方してて、どうして教師になったんですか？それに、仕事に理想を持っていないとしても、今日は初遠足でしょう。ふつう、それまでさぼりますか？」

「…行こうと思った」

「え？」

カカシが何かを呟いた。夜になっても眠らない都心では、時折パチンコ店のドアが開くたび騒音に近い音が聞こえる。

声が聞き取りずらくてテンゾウは二人の間の距離を少し縮めた。

「行こうと思つて学校の近くまで行つたけど、ずっと並んだバスを見て駄目になった」

「バスが駄目って…どういう事ですか？」

「事故に合ったんだ、昔、遠足のバスに大型のトレ
ーラーが突っ込んできて…近くに座ってた同級生
と担任が亡くなって」

「えっ…？」

想像もしていない言葉にテンゾウは絶句する。

「それからバスが駄目で…」

「乗れなくなっただんですか？」

「うん…」

カカシが下を向く。

まさか泣いてる？テンゾウはどうしていいのかわからない。こんな時なんと言葉をかければいいのか、高3の自分が聞くには重い告白。

俯くと、長身でも身体の線が細いカカシはひどく弱々しげに見えた。

「先生…」

テンゾウがどうしていいか分からないまま、その肩に手を伸ばした時、カカシが声を上げて笑う。

「あはは…。お前ほんと素直だよな」

「へ？」

「あはは…。まさか、マリファナの話の後にそんなにあっさり信じるとは思わなかった」

「い、今の話も嘘なんですか！？」

怒り、脱力そして再び怒り。テンゾウは大声でカカシに詰め寄る。

「俺は教師としてお前の将来が心配になるな。そんな素直な奴が悪徳詐欺商法に引っかかったり、カルト宗教に勧誘されたりするんだよ」

カカシは笑いながらテンゾウに言う。

「よくもそんな悪質な嘘をつけますね」

「マリファナとか事故とか、信じる方がどうかと思うよ。非現実的だろ」

「だから、それは先生が…」

「教師の言葉だから？夢見過ぎ」

カカシに言おうとしたことを否定され、テンゾウ

はつくづく呆れた。

ほんとにこの人はなんで教師になったんだ。安定した職が欲しいだけなら、他の仕事もあったらうに。

カカシがくすくす笑いながら言葉を続ける。

「お前の場合、将来ついていうより今の帰りが心配だよ。繁華街で客引きに捉まってボったくらられる典型的なタイプ。あ？そういうええばなんで、遠足の日のこんな時間に、お前はここにいるんだ？」

「そこ、気づくの遅すぎ」

「テストの1点、2点に拘る優等生かと思ってたけど、意外に悪とか？」

「あなたとは違う。遠足の打ち上げをこの近くでして、ついでに参考書買おうと思って」

「参考書ねえ…。ま、いいや。そろそろ帰れ。ほんとに客引きには気をつけろよ」

カカシが小ばかにしたような薄笑いを浮かべて手をひらひらさせて去って行くこうとした時、さすが

に言われっぱなしで腹立たしくて我慢が出来ないとテンゾウは思う。

日頃、人あまり悪意を感じないのだが、この教師には言い返してやりたい。

「ちよつと先生。お礼されてないけど？」

カカシが振り返る。

「お礼？」

「チンピラから助けたんだから、その対価は貰わないと」

テンゾウは、カカシが送信したというPCメールのことは仕方ないにしても、自分が喫煙している様に見える画像のスマホに保存されているぶんだけでも、自身の手で削除したかった。

「お礼ねえ…」

カカシは、やはり薄笑いを浮かべながらテンゾウの方に近づく。

「確かに、助けてもらったんだから礼はしないと」

カカシは素直に頷く。

別に頼んでないとかひねくれた事を言いそうだったので意外に思うが、ここは一気に畳み掛けてやる。

「スマホ出して」

そうテンゾウが言うと、それも素直に出す。

引ったくって保存画像をタップする。テンゾウの喫煙にみえる画像は直ぐに出た。というか、テンゾウの画像しか入ってなかった。削除すると、このフォルダは空となる。

彼女とツーショットとか、保存してないんだなとふと思う。モテることは間違いないから、単純に一人に決められないだけかもしれないけど。

「画像削除だけ？」

テンゾウがスマホを返すとカカシが問う。

「ラインのコードでも撮るのかと思った」

「ライン？何で？」

「しつこく絡むから、俺に気があるのかと」

「へ…？」

「俺、モテるんだよね。女にも男にも」

テンゾウはもう言い返す気力もない。

自分がモテるとこんなにあっさり口にする人っているんだ。しかも、同性って…。確かに誰にでもモテそうだから否定はできないけど。

今日一日、いやこの数分間で、今まで生きてきて聞いたことのない言葉を聞きまくっている。

「ま、礼はしておく」

そう言っつて、カカシは両手を前に伸ばしたかと思うとテンゾウの頬を挟み、形の整ったその唇をテンゾウの唇に合わせた。

「!？」

僕は今…なにされている…？

カカシが更に角度を変えて、何度もテンゾウの唇を覆う仕草を行ったところでようやく正気に返る。

テンゾウが押し返そうとするより一瞬早く、カカ

シは身体を反転させた。

「じゃあな。キャッチに掛からず真っ直ぐ帰れよ」

カカシは学校で見せる、アイドル&モデルの笑顔を残して直ぐに歩き出した。

テンゾウはその場から動けない。

な、何するんだあの教師…。

「信じられない…」

去って行くカカシの背中を見ながら、テンゾウはただ茫然としていた。

第四章

遠足翌日の授業で、カカシはテンゾウの前に現れた。

カカシは何事もなかったようにテンゾウに特別目を向けることもなく、いつもの穏やかな笑みで遠足を休んだことを皆に詫び、授業を進める。

滑らかに英語を発音するカカシの口元を、テンゾウの方がつい意識してしまう。

キスした…、あの口と。

考えかけて、頭をフルフルとする。冗談じゃない。何が礼だ。男にキスされるなんて、むしろ罰ゲームだよ。

でも…。すごく柔らかかった…。

「Please read the58 page-Mr.Yamato」

「え？あ…えーと…」

当てられて自分が授業に集中できていないことを自覚する。

「Do you understand?」

「え…No, I don't understand.」

カカシがテンゾウに近づく。

「Please read here.」

テンゾウの教科書の58ページを右人差し指で

トントンとしながらカカシが言った。

その時、カカシが右手首にリストバンドをしている事に気づく。それまで顔、というより口元ばかり見ていたので、気づかなかった。

テンゾウが視線を手首から顔の方へ移動させる

が、カカシはすっとその場を離れていく。

授業終了近くになり、カカシが宿題の内容を黒板に書いた。

生徒たちは否定することが習慣のように、「えー、

やだー」

などと文句を言いながらも、それぞれ書き写す。

その時一人の生徒が聞いた。

「先生、どうして今日はリストバンドしているの?」

「Question please go in English.」

カカシに質問は英語でと言われて、帰国子女もいるテンゾウの特進クラスではひるむことなく誰かが聞く。

「Why are you wearing a wristband?」

「Because I was injured.」

「Why did you get hurt?」

「It is a secret.」

怪我をした理由は内緒だと言って、カカシは微笑む。

最後に、この前の誤採点があった答案を提出した生徒に返し、授業を終わろうとした。

テンゾウは顔を上げる。

「あれ?先生待って。ああ、ええと」

カカシの授業は基本すべて、会話は英語でと言われている。

「I have not got my test!」

カカシが教室を出ようとしたのでテンゾウは何とか英語を捻りだす。

自分も誤採点があつて再提出したのにテストを返されていない。

「Oh! I'm sorry I forgot!」

すかさず謝つて、極上の笑顔を作りカカシは続けた。

「Please come to take after school!」

「あゝ after school?」

「yes!」

「先生ったらやっぱり天然〜」

女子のカカシの天然ぶりをからかう声を聞きながら、テンゾウは絶対わざとだなと内心思う。

1点、2点を大事にしてくれと注意したことをきつと根に持っているんだ。だから昨日もあんな目に…。

キスを思い出し、一人赤面する。

それから放課後になるまでに、カカシの噂に新たな話が付け加えられた。

あのリストバンドはリスカの痕を隠すため、昨日の遠足を休んだのもそのせいではないかと。

穏やかな笑顔の下に何か悩みがあるんだと、すっかり悲劇の王子様扱いとなっていた。

放課後、掃除しながらその話をサイから聞いたテンゾウは思わず失笑する。

「ないない。あの先生はそんなキャラじゃないよ!」

「なんでわかるのさ?」

「まあ、それは僕の印象だけど…」

迂闊なことは言えない。喫煙している様に見える自分の写真のスマホ分は削除したが、きつとメールでパソコンに送られている。

しかし女子の想像力には感心する。どうせ想像するなら、実は悪キャラとか思わないのかな。

あの先生は悩める王子じゃなくて、人の悩みが蜜の味、という悪魔だよ。

進学校のテンゾウ達の学校では、クラブ活動もそれなりに行われているが、スポーツの方はさして強豪ということはなく、3年ともなれば参加もかなり緩やかだ。一応引退は夏の大会が終わってからという事になっているが。

「今日はクラブ休む」

同じバスケ部仲間の鹿丸に伝言してテンゾウはカカシのいる職員室へ向かった。

姿が見えなかったので、ちょうど通りかかった同じ英語科の不知火先生に尋ねる。

「ここにいないなら、視聴覚室で準備してるんじゃないかなあ。明日はリスニング授業をするとかかって言ってたから」

ほら、テストを取りに来いとかかって言っておきながら、職員室にいないんだもの。絶対ただの嫌がら

せだよ、などとテンゾウは思いながら視聴覚室に向かう。

視聴覚室の部屋に入ると、教材のDVDから女性が話す英語がスピーカーから流れて、その部屋の真ん中にカカシが座っていた。

「カカシ先生」

「やっぱ来たな。ここって誰かに聞いた？」

振り返ってカカシが言う。

「不知火先生に聞きました」

「あ、そう」

カカシがリモコンを操作し、DVDを止めた。

「テスト取りに来いって言った時、視聴覚室とは言わなかったじゃないですか」

「ああ…まあ大事なテストならどこでも取りに来るだろうって思ってたね」

やっぱりあの注意を根に持っているんだとテンゾウは思う。何か言い返したい。

「カカシ先生が真面目に授業の準備とかするとは思わなかったな」

「何だよ、人聞き悪いな。俺はいつでもありったけの準備をして授業に臨んでいる」

「これほど言葉に重みのない教師は初めてですよ」

「全くいちいち突つかかるなあ…。お前やっぱ俺に気があるんじゃないの？」

途端に昨日のキスが再び思い出される。全身、服に隠れて見えないところまでカーツと赤く熱くなつたのが自分でも分かる。

忘れようと努力しているのに。

「な、何言って…。ぼ、僕は批判しているんです。ど、どうしてそんな風に…。だ、だいたいキスしてきたのは先生の方じゃないですか、せ、生徒にキスとか…。セクハラ、そう！セクハラですよ」

しどろもどろで我ながら情けない。

「あはは…。セクハラって嫌がっているのに無理や

りすることだろ。ほら、これさ」

カカシが右手首のリストバンドを外した。

そこは腕輪のようにくつきりと内出血していた。まるで縛られた痕の見える。

「いくら何でもこれはまずいからリストバンドで隠してた。人に言えない趣味でもあるみたいで。ほんとはお前に腕を掴まれてた痕だけ。こんなに必死に掴んで俺の事助けようとしていたのかと…。だつたら礼に、キスでもしたらいいかと思っただけ」

カカシがやっぱり小ばかにしたようにくすくす笑いながら言った。

誤採点を注意した自分をからかって楽しんでいるだと腹立たしく、テンゾウは何とか言い返したいと思う。

「僕は！」

「なあに？」

机に肘をついて、小首を傾げてカカシがテンゾウを見る。

高校教師にしておくにはもったいないと思えるくらい、そういう何げない仕草も絵になるのは認める。

確かにね、かっこいいよ、いや、単にかっこいいというより、つい見てしまう魅力…中性的というか…。

だけど、男の教師に気があるなんて、そんなからかわれ方、冗談じゃない。

「僕はカカシ先生でなくても助けてましたよ。知り合いなら」

「ふーん…正義感強いこと」

カカシは相変わらず小ばかにした表情で言う。

テンゾウはカカシが外して机の上に無造作に置いたリストバンドを見て、言い返すネタを思いつく。「それ」

腕に視線を投げかけ、カカシの横に座りながら言葉が続けた。

「縛られる趣味と変わらないくらいのやばい噂になってました」

「何？」

カカシは見せかけの笑顔を作ったまま聞き返す。

「女子の間でリスカの痕じじゃないかって。いつも笑っているけど本当は悩み深き王子様なんだということになってましたよ。リストバンド一つでそこま

での想像力もすごいけど、笑っちゃいますね。ほんとのあなたは、人を悩ませることが楽しい人なの」

カカシはふと無表情になり、テンゾウから視線をずらした。

「自分で傷つけるなんてしない。…一緒にいけてたら楽だったろうとは思うけど」

意識がここにはないかのように、テンゾウから視線を外したまま、ぼつりと呟いた。

「え？」

DVDの音を消して静かになっていたのでカカシの喧きは聞こえたが、その意味が分からずテンゾウは疑問符を口にする。

カカシがふつと意識を取り戻したかのようにテンゾウの方を見つめなおす。

「ああ、それいいね。悩める王子様キャラ。来年はそうしようか」

自分が思わず呟いたことには触れず、カカシは再びいたずらっぽく微笑を浮かべる。

「毎年キャラ変えるつもりですか？」

「そのほうが楽しいかと思って」

「もう少し、教師職についてのモラルってものはないんですか？」

「難しいこと言うなあ。さすが優等生」

「カカシ先生は何を思っただ教師になったんですか？」

昨日、チンピラから助けた以降、嘘ばかり並べる

カカシに對してもう一度その疑問を口にする。

「さあね。なりたかったのは俺じゃない」

「俺じゃない？」

テンゾウの問いにカカシはほんの少し無言になった。

時折、何かの言葉をきっかけにカカシが素の表情を見せることにテンゾウは気づく。

それは本当に瞬間という程に僅かな時間。この先生には、自分が思っているのとは違う側面があるのかもしれない、とテンゾウはふと思う。

「…いいよ、俺のことはもう。お前の用事は自分の答案用紙だろう。それは職員室にある」

「えっ？じゃあどうして視聴覚室まで来させたんですか？」

「お前が勝手にここまで来たんだよ」

「だって、先生が放課後に取りに来いって言ったん

でしょう。そりや誰かに聞いてでも来ますよ。それなのにやっぱり職員室にあるとか、なんですかそれ」
散々コケにされてきたから言葉も強くなる。

「それはね。単に俺に説教かましたお前への嫌がらせ」

カカシがにつこりと魅力的な笑顔で答える。

「はあ…そうですか…やっぱりね」

分かってはいたが、はつきりと口に出して言われ
全身脱力する。

一言撤回だよ、この先生、深く考えてることなんてないただの不真面目な奴なんだ、きつと。

それからカカシと一緒に職員室まで戻り答案用

紙を受け取る。

合計点は91点に変わっていた。

「ごめんね、今度から気を付けるよ」

カカシは申し訳なきような声を出し、テンゾウに
謝罪する。

職員室には他の先生も大勢いる。

カカシの言葉は誤採点を注意した自分への嫌味
とテンゾウには分かるが、周囲には爽やかに自分の
非を認める新人教師にしか映らないんだろうと思
う。

喫煙風の写真を押さえられているテンゾウは、も
うカカシ先生には極力近づかないでおこうと内心
誓った。

第五章

日ごとに日中の最高気温が前日を上回る様になり、季節は夏を迎えていた。

受験生にとっては夏は勝負の時。テンゾウがいるレベルの高い特進クラスは、さすがに段々と雰囲気も変わってきている。

テンゾウもそれなりに受験勉強に時間を割く生活スタイルにシフトしていた。

夏の体育は基本水泳だが、ちょうどその日、テンゾウ達の体育の時間に雷が鳴り、大粒の雨が降り出した。

夏によくある夕立だが、すぐに止むとは限らない。体育の並足教師はちようど体育館が空いていたからと、室内体育に変更した。

予定外だったこともあり、体育館で出来るスポーツでわざわざネットを立てたり、器具を出したりしないで済むという理由で、バスケットをすることになる。

バスケットのゴールネットはこの体育館でも初めから備え付けられている。後はボール一つあればいい。

テンゾウはバスケット部だ。久々に体育で得意のバスケットをすることになり、テンションが上がった。

3点シュートを次々決め、バスケット部としての面目を充分に果たしてメンバー交代したが、コート外に出た途端目の前が真っ黒になる。

「おい、大丈夫か？」

くらくらとしてしゃがみこんだテンゾウをサイが覗き込む。

「いや……ちよつと無理かも……」

身体が異常に熱く感じる。

「先生！大和が……」

「水分とった？」

「熱中症じゃないか？」

周囲が騒がしくなり、テンゾウはぼうつとした意

識でも、カッコ悪いなと思う。

何とか気を張り、体育教師に自ら声をかける。

「先生……ちょっと保健室で休んできますか？」

「大丈夫か？」

「はい、休めば大丈夫……」

少ししゃがんでいたので、目の前が真っ暗になる
感覚は収まっていた。

立ち上がるとやっぱりふらつきはするが、何とか
歩ける。

サイが医務室までついて来てくれた。

養護教員のシズネ先生はサイから体育館でのバ
スケと聞いて、雨が降って余計に湿気が多い中で激
しく動いて熱中症になったのだらうと、とにかく冷
やすことを指示した。

「何かスポーツドリンクでも買ってきましょう
か？」

サイが聞く。

「ありがとう、でもあなたは授業に戻りなさい。先
生が買ってくるから。他の皆も水分補給する様に私
が言っていたと並足先生に伝えてね」

保健室のベッドに横になり、部屋の冷房を少し強
めにしてアイスノンを頭の下に敷き、額や、首筋に
当てる様にと保冷剤をいくつか渡してくれたシズ
ネ先生に礼を言いながら、テンジウは倒れた原因は
温度だけでなく自分にもあると思う。

期末試験に向けて睡眠時間を減らしていた。

やっぱり無理してたよな……。

ほんとかつこ悪いか思いながら、スポーツドリ
ンクを購買で買ってくるというシズネ先生の言葉
に頷く。

目を閉じ、涼しい室内で頭も冷やしてもらい、カ
ツカしていた体温も徐々に下がってきた。

そもそも睡眠不足だったこともあり、うとうとし
かけた頃、シズネ先生ではない男の声が遠くで聞こ

える。

え？今の声…？

うとうとしかけた意識が現実引き戻されていく。

「おい、起きろよ。これ飲め」

カカシがベッドサイドに立っていた。

「カカシ先生…」

「ほら、これ飲め」

カカシはもう一度同じことを言い、手にしたスポーツドリンクのペットボトルを差し出した。

「あの…」

「起きられるか？」

「あ、はい」

テンゾウは起き上がってとりあえずカカシが差し出すドリンクを受け取った。

きゅつと蓋を開けて飲みながらカカシの方をちらと見る。

もしかして心配してくれているか…？いや、からかいに来ただけかも…。

「熱中症だつて？」

「はい…多分」

「気を付けろよ。熱中症って深刻な症状になる時があるから。今は…大丈夫そうだな。とにかくそれは全部飲め」

え…？

やっぱり心配してくれてる？あのカカシ先生が？

「あの、カカシ先生はどうしてここに？」

テンゾウはドリンクを飲みながら聞く。

「ああ、暑いから涼みにここにきたら、シズネ先生がスポーツドリンク持って帰って来たところで、お前が寝てるって話し聞いたから」

「はあ…」

涼みになってなんだ？テンゾウは多少カカシの言

葉にひっかかりを感じながらも今は黙っていた。

「シズネ先生が担任のイルカ先生に知らせなきゃ
って言うんで、俺がお前に飲み物を渡しておくから
って、職員室に行ってもらった」

「…あの、それなら普通はカカシ先生がイルカ先生
に知らせに行くんじゃないですか？」

「どうせ俺はここで休むつもりだったもん」

そういうとカカシはふっと隣のベッドに行きそ
のまま横になる。

「…先生も体調悪いんですか？」

本当にベッドに横になったカカシにテンゾウは
聞く。

「いや、涼みに来ただけ。職員室もクーラーきいて
るけど、横にはなれないだろ。今は授業のない空き
時間なんだ」

「保健室って涼む所じゃないでしょう。よくシズネ
先生が許してくれますね」

「お前、体調悪い時まで優等生発言するよな。シズ
ネ先生はそんな嫌味言わないで、いつもどうぞって
言ってくれるぞ」

養護教諭のシズネ先生は確か独身だったなどとテ
ンゾウは思う。年は多分30代くらい。

ベッドに横になって右腕で片肘をつけてそこに
頭を預け、こちらを見て、いつもの爽やかな微笑を
見せるカカシを見る。

シズネ先生も騙されてるよ…。そりゃあの顔でち
よっと横になりたいんです、とか言われたら断れな
いかもしいれないけど。

「大和君、どう？」

シズネ先生が保健室に戻り、テンゾウ達のいるベ
ッドが3台並ぶエリアに入ってきて来る。

「あ、もうだいぶいいです。身体も熱くなくなりま
した」

「イルカ先生が親御さんに知らせた方がいいか気

にされていただけ」

「いえいえ、大丈夫です。どうせ共働きで母もこの時間仕事ですし」

「そう？」

「はい、軽い熱中症だったみたいで、本当にもう大丈夫です」

「じゃ、よかった」

シズネ先生は今度はカカシのいるベッドに向かう。

「カカシ先生はいかがですか？」

「はい、大丈夫ですが、もう少し横になっていいですか？」

「もちろん。先生は今年来たばかりだから色々気を使われたり、授業に追われて休息がとれないことも多いでしょう。無理せず疲れた時は休んでください」

シズネの優しい言葉を聞きながら、テンゾウはや

っぱり騙されていると思う。

先生、その男は涼みに来てるだけです。騙されちゃいけません、と言いたいがそこは黙っていた。

「じゃ二人とももう少しゆっくり休んで」

シズネ先生はそう言ってカーテンの向こう側に消えた。

テンゾウがカカシの方を見ると、もう目を閉じている。

ほんとうに涼みに来たんだ。少しでも自分を心配してくれていると思った僕がバカだった。

カカシが気にかけてくれたと思ったのが結局違うと分かり、テンゾウは微かな落ち込みを感じながら、微睡む。

やがてチャイムの音が、テンゾウを眠りから引き上げた。

「起きないと…昼飯食えなくなる」

体育は4時間目だった。テンゾウは起き上がるが

もうふらつきはない。熱中症だったが、涼しくしてもらったり水分補給したりで、軽く済んだようだ。

ふと隣のカカシを見る。

目を閉じて、本当に寝息を立てているようだ。

少し長めの髪が横になっっているので左右に流れ

ている。色白の額に何かついていっているような気がして、テンゾウはカカシの眠るベッドのそばにいく。

「あ…」

無意識に声をあげた。

傷痕だったのか…。

カカシの額には左目眉にかかるくらい縦に真っ直ぐな傷痕があった。縫った後の少し引き皺れたような痕。

社会人にしては少し長めの髪、かきあげる仕草はいつも右手。これを隠していたのかなと思う。

薄く、きつと数年前の傷でそばに寄らないと分からない程度だが、本人は気になるのかもしれない。

男なんだから傷の一つや二つあってもおかしくないのに、とテンゾウは思う。

自分も小学校の時階段を走って転げ落ち、腕を骨折した事がある。その時の縫い後はやっぱり残っている。

カカシの顔を至近距離で見ると、顔のパーツ一つ一つが整っているとわかる。長いまつげ、色白の肌、薄桃色の唇。

上掛けをかぶって喉仏が隠れている今は、女性が寝てると言われたら信じてしまう。

こんな綺麗な顔過ぎて傷一つが気になるんだろう。

この人とキス…。

再び忘れようと努力している事を思いだし、テンゾウは慌てて、そこから離れシズネ先生の元に行った。

「すみません、もう戻ります」

「大丈夫？」

「はい、お腹へったし」

「食欲あるなら大丈夫ね」

「あの…」

「何？」

「カカシ先生つてよく保健室に来られるんですよ」
ね

どの程度さぼっているのかちよつと聞いてやろうと思う。

「初めてよ」

「え…そうなんですか？」

「どうして？」

「あ、いえ、別に」

カカシはよく涼みに来てるみたいな事を言っていたのに、実際は違うのかと思いつながら、テンゾウは礼を言つて教室に戻った。

「おーもういいのか？」

サイが聞く。

「うん、ありがとな」

「カカシ先生に会つただろ？」

「来たけど、なんで知ってる？」

「僕が教えたんだよ。体育館に戻る途中呼び止められて。まあ、授業中歩いている生徒見たらそりゃ声かけるよな」

「それで？」

「お前が倒れたこと教えたら様子見てくるって、小走りになってたぞ。やっぱあの先生、生徒想いのいい先生だな」

いつものように良い先生の仮面を被っているわけじゃない。だつてカカシ先生は実際に自分のところに来たのだから。しかもサイに聞いたとは言わなかった。涼みに来ただけと。

もしかして本当は自分の事を心配してくれていたのかも…。

ほんの少し、いやかなり浮ついた気分になるのを、

テンゾウは自覚した。

第六章

期末試験の時、少なくともテンゾウのクラスでは、カカシに誤採点は一つもなかった。

少しは自分の言葉を聞いてくれたのだろうか。

天使の仮面を被った悪魔ということを知ってから関わらないでおこうと思ったのに、軽い熱中症で倒れた時には心配してくれた。

偶然のように見せかけて保健室に来たが、実は気にかけてくれていたのを、シズネ先生やサイの言葉から判ってしまった。

複雑な人だなと思う。

他の皆にはいい人の仮面を被り、そうじゃない側面を知ってる自分には、心配している事を隠したりする。

ほんとにどういう人なんだろう…。

テンゾウのクラスは特進コースのため期末試験後も補習授業があつたが、英語の授業中、カカシが

右手で長めの髪をかき上げる仕草につい目を奪わ

れる。

左の額に傷があることも知っているが、そうであ
っても綺麗な顔だと思う。

そしてあの口元。

授業中にまたもやキスを思い出して、わけもわか
らず叫びそうになる。かろうじて理性で押さえては
いるが。

いつそ早くカカシの姿を見ないで済むように夏
休みになれと思っていた。

しかし実際1学期最後の授業となった時、女子達
からカカシ先生に会えないなんて寂しいという声
が出て、テンゾウの心に同じ感情が湧く。

その気持ちに気づき、慌てて否定する。

何で自分が男の教師に会えなくて寂しいなんて、
そんな感情おかしい。

第七章

夏休みに入ってしまったえば、受験生であるテンゾウ
は夏期講習に追われる毎日を過ごしていた。

「あーなんで夜も暑いんだよ…」

塾の最終コマまで参加し、終電の2本前という遅
い時間の電車に乗っていた。

自宅の最寄駅に着き、冷房の効いた電車から夜で
もむわっとした夏特有の熱気に覆われている外気
に触れる。

郊外の住宅地で住んでいる人口は多い。遅い時間に
も関わらず改札へ向かう階段を下りている人は割
といた。

ふとテンゾウはその人々の間に知った後姿を見
つけた。しかも同時に二人。

カカシ先生と不知火先生。

普通に歩いているだけでも暑いのに、不知火はカ
シの肩に手を回そうとして振り払われる。

『俺モテるんだよね、女にも男にも』

カカシの言葉が思い出される。

マジで男にもモテるのか…。

どう見ても不知火がカカシにちよつかいをかけている様に見える。

考えるより先に、改札を出た二人をテンゾウは追っていた。

不知火がカカシにずっと話しかけている。声は聞こえない。何度も手をカカシの肩に回し、あるいは腰に回し、そのたびに振り払われている。

駅前の広い道から人通りの少ない道に入ったところで、カカシは立ち止まった。

テンゾウは電柱の陰に隠れる。

「不知火先生、今日は家に入れるつもりないですか」

大きめの声でカカシが言う。

「なんで急につれなくなつた？まさか他に相手が

出来たのか？」

不知火の声もやや大きくなり、テンゾウの耳に届く。

テンゾウは呆然とした。

これって何だ。まるで恋人同士の喧嘩のような…。

二人はまさか、付き合っている？

不知火がカカシの腕を掴んで、もう片方の手で強引に肩を抱き寄せようとした。

「ちよつと、ほんとにやめ…」

カカシは振り払おうとする。

テンゾウはいつかのチンピラに絡まれてるカカシを見た時よりは冷静だった。

冷静という言葉は正確には違うかもしれない。

心がスーッと冷え切っていく感覚。

少なくともカカシは嫌がっているようだったので助けようとは思ったが、それはカカシのためというより、不知火がカカシの腕を掴んでいることが、

不知火のカカシに発する言葉が、とても不愉快に感じたから。

ただ一刻も早く二人を離したい。

「不知火先生、カカシ先生。こんばんわ」

テンゾウは突然大きな声を出して二人に挨拶をする。

二人はその声に一樣にびくつと驚き、揃ってテンゾウの方を見た。

不知火は掴んでいたカカシの腕を離す。

「お前は……」

不知火は英語だが、テンゾウのクラスは受け持っていない。しかし先生という呼びかけで生徒ということはずぐに分かったようだった。

表情に驚きと戸惑いが現れている。

「大和、随分遅い時間なのに、何をしている」

カカシの方は、それほど慌てた様子もなく、ごく通常のトーンでテンゾウに問う。

「塾の帰りです」

「ああ、そうか」

カカシは凍り付いたように立ちすくむ不知火とは真逆な陽気な声を出し、そのままテンゾウの方に歩み寄る。

「大変だな、受験生は。それにしてもこんなに遅い時間は危ないな。送っていいんか？お前の家は俺と同じ方向だし」

「え？でも」

テンゾウはわざとらしく不知火の方を振り返る。

「俺達は英語科の先生達で親睦会があつてね。駅は一緒なんだけど、不知火先生の家の方角は反対だから」

「そうなんですか」

テンゾウは嘘とわかっているカカシの言葉に頷いてみせた。

「じゃ、今日はお疲れ様でした」

カカシが作り笑顔で不知火に挨拶する。

「あ、ああ…」

「おやすみなさい、不知火先生」

テンゾウも挨拶をしてカカシと一緒に歩きだす。

不知火が見ているのか、いないのか、分からない

まま二人は振り返らず歩いて行く。

話しても声は不知火に聞こえないだろう距離と

なり、テンゾウはカカシに話しかけた。

「カカシ先生、僕の家を知っているんですか？」

「知るわけない」

「はあ…やっぱり」

「そんな事分かってて俺の嘘に付き合ってたんだろ」

「まあ、そうですけど」

「お前ってほんと、いつも俺が見られたくない場面

にいるよな」

「やっぱり見られたくない場面だったんですね」

テンゾウは不知火との関係を聞き出したかった。

曖昧にしたいくない、はっきりとストレートな言葉を

使う。

「カカシ先生は不知火先生と付き合っているんで

すか？」

「質問タイムは終わり。着いたから」

カカシがワンルームマンションの前で立ち止ま

った。

「俺んちここなの」

テンゾウはカカシが言った言葉を思い出す。

『今日はもう家に入れる気はないですから』

不知火はカカシの部屋に入ったことがあるのだ、

きつと。

そう考えると言いようのない重苦しい気持ちに

なった。

「お前んちは？」

「…僕の家はここから徒歩だと20分以上かかり

ます」

「え：そうなのか」

カカシは前の道を見つめながら表情を曇らせた。

そのカカシのワンルームマンションの1階にコンビニがあったが、そこから先は住宅街が続いている。路地を照らす街灯以外の明かりはなく、駅から降りた人達もそれぞれ違う方向に別れ、そこではもう人通りもほぼなかった。

「ほんとは駅の駐輪場に自転車停めてて、いつもそれで帰っているんです。でも今日はカカシ先生たちを見たので」

「そうか：今から駅に戻るか？それにしても10分はかかるよな：。ほんとにこの時間の徒歩での一人はまずいな」

「心配してくれるんですか？」

「お前に何かあって俺の教師のキャリアに傷がつかないか心配なんだよ。不知火先生にお前を送るって言っちゃってるしな」

そんな風に表現しても、実は心配してくれているだろうとテンゾウは思う。

熱中症の時と一緒に。

「この時間に一人歩き危ないって言うんなら、泊めてください、先生の家に」

テンゾウは、カカシの目をまっすぐ見つめて言い切る。

「男二人眠れるベッドなんかないよ」

「真夏だし、それこそ男だし、床にごろ寝で充分です」

「でも生徒だからなあ：。あ、じゃあタクシー呼んでやるよ。金は俺が出す。不知火先生から離れる事が出来た礼もあるし」

「礼はキスじゃないんですか？」

テンゾウの突っ込みにカカシが苦笑いする。

「あれはお前をからかったんだ。真面目過ぎるから、そういう真面目な奴が思いもしない方法がいいと

思つてさ」

分かりきつていた答えだったが、カカシから『からかっただけ』とはつきり言われると、少なからずショックを受けている自分を自覚する。

カカシにとつてたかが冗談に、自分は数か月振り回されている。

ただ、今はどうしてもカカシの部屋に入りたかった。不知火先生が入ったカカシの部屋に。

「タクシーなんてわざわざもつたいたないですよ。新人教師なんて安月給でしょ。明日の朝にはここから駅に行きます。一晩床のスペースを貸してください」

「さらつと失礼だよな、お前。それにやっぱり生徒を泊めるのは…」

「歯ブラシとパンツ買ってきます」

「あ、おい…」

カカシの答えを聞かずにテンゾウは目の前のコンビニに入り、歯ブラシと下着を買ってドアまで戻

る。

「真面目な奴と思つてたのに、外泊なんて不良だよ」

「親に電話するけど、話し合わせて下さいね」

テンゾウはカカシの言葉に乗らず自分のペースで話しをすすめていく。不知火が入ったカカシの部屋に、自分もどうしても入りたかったから。

親には自転車がパンクした時にちょうど副担任のカカシ先生が通りかかつて、泊めてもらうことになったと伝えた。カカシにも電話に出てもらい、納得してもらう。

第八章

「ワンルームだからな、狭いよ」

「ほんとですね」

カカシが苦笑する。

「何？今までの仕返し？さつきから失礼発言連発」

「僕は……」

聞きたいのは不知火先生と付き合っているのかという事。

「ここに不知火先生も来たんですか？」

「シャワー浴びるだろ。パンツ買ってたし。タオルは貸してやる」

また誤魔化したと思う。カカシはいつも嘘ならペラペラと話すのに、真実は隠す。

しかしこのまま詰め寄っても言いそうにないと思ひ直し、素直にシャワーを借りた。

カカシがTシャツも貸してくれたのでそれを着る。

そのまま洗面所で歯磨きをして、そこにはカカシの分しか歯ブラシがないことを確認する。安堵の気持ちと、そんなことで安堵する自分に戸惑う。

「冷蔵庫の中のペットボトルは適当に飲んでいい」
そう言つてカカシは入れ替わりにシャワーを浴びに行った。

あらためて部屋を見渡す。

シングルベッド、ローテーブル、テレビとオーデオが入ったラック、ベッドサイドに三段ボックス。服類はクローゼットに入っているのだろうが、本当にごくシンプルな部屋。

女性の影がない。

同性と付き合う人がいることは、もちろん知識として知っている。やはりカカシはそうなのかもしれない。そしてその相手が今は不知火先生なのかも……。

カカシはアイドル的に誰かれなく好かれていたが、不知火は大人の落ち着きが良いという女子に人

気だった。

つい先ほどのカカシの肩に手を回す不知火の姿を思い出す。どちらも恰好よくて、似合っているとさえ言えれば似合っている。

不愉快だった。カカシと不知火が付き合っていると考えるだけで、心に鉛が打ちこまれたように重くなる。

自分も女子には多少モテて、告白されたりバレンタインのチョコを学年で一番多くもらったりしてはいるが、不知火に比べれば所詮子供。

カカシにとっては生徒。ただ、色々とカカシの表向きとは違う側面に、偶然が重なり触れているけれど。

ベッドは出窓の前にあり、その出窓部分に写真盾が置いてあるのを見つけた。

男の一人暮らしで写真を飾るという習慣がちよっと珍しいと思いい手を伸ばす。

そこには中学か高校、おそらく中学と思われる体操服を着たカカシと、女の子、そしてもう一人の男子にジャージを着たおそらく教師らしき大人の男が写っていた。

「中学生かなあ……つかこのころからすでにアイドル顔だよな、かつこいいいというか、可愛いというか……」

写真の中のカカシはむすつと口を結んでいたが、一層整った顔立ちが目立っていた。

「俺の事？そりやどうも」

テンゾウの呟きにいつの間にかシャワーを終えて後ろに立っていたカカシが答えた。

Tシャツにボクサーパンツ一枚。自分と同じ格好で、男なのだからそれで十分なのだが、むき出しの足の肌が白くて体毛も薄く、急に胸がざわつく。

その動揺を悟られまいと、テンゾウは殊更写真に話題を振る。

「あ、ごめん勝手に触って」

「…まあ、触るなどと言わなかったし」

テンゾウがカカシに写真を返ししながら聞いた。

「中学の時の？」

カカシは写真を受け取り、それを眺めながら答える。

「うん、中三の体育祭の時」

「後ろの人は先生？」

「そう、三年の時の担任」

「あとの二人は同級生？」

「同級生で、小さい時からの幼馴染」

「実家ならともかく、一人暮らしの家にまで持ってくるなんて、よっぽどいい思い出の写真なんだね」

「…」

ふいに無口になるカカシにテンゾウは怪訝な視線を向ける。

「カカシ先生？」

「もう寝ろよ。ベッド使っているから」

カカシは出窓に写真を戻しながらテンゾウに言う。

また話を逸らしたとふと気にとめたが、テンゾウにとつて一番聞きたいことは写真の事ではない。

「寝るのはほんと床でいい。このクッションを枕替わりに借りるから。それより不知火先生はここに来たの？」

「なんでそんなに不知火先生にこだわるんだよ」

「さっきのあんな場面見たらそりや気になります、二人とも自分の学校の先生なんだから。実際どういう関係なんですか？」

「付き合っているのかっていう質問ならNo」

「ほんとに？」

「男同士にする質問じゃないだろ」

「自分で言ってたじゃないですか。男にもモテるって。す、好きなら、そんなこと、性別とか関係ない

と思うし」

妙にドギマギして、カカシに言いながら自分自身にも言い聞かせているような気になる。

「へー…高校生にしては随分理解あること。お前やっぱり俺に惚れてるんじゃないの？」

カカシはベッドの上に横になり、片肘ついてテンゾウの方を見ている。上掛けをかけていないのでボクサーパンツ一枚から伸びる白く細い足が強調されて、目のやり場に困る。

その上カカシに惚れているのかと言われて更に動揺する。

「ぼ、僕は！」

つい夜中なのに大きめの声を出してしまう。自分の声の大きさに気づいて、テンゾウは慌ててトーンを落とした。

「僕は、写真を削除してもらおう交渉のネタになるんじゃないかと思っただけで」

「写真？」

「大麻って騙されて、喫煙してるみたいに見える僕の写真。パソコンにメールで送ったって」

「ああ！あれ、本気にしてた？」

カカシが笑いを堪えながら聞く。

「へ…？」

「スマホには撮ったけど、メールで送ったりしてない。そんな面倒な…からっただけなのに…。あはは…」

カカシがベッドの上で笑う。

いつもの作り笑顔ではなくて、本当におかしくて笑っているカカシを見て、テンゾウは自分が笑われているにも関わらず、なんだか心が和らいだ。

「面白いな、お前」

「すいませんね、バカで」

カカシの言葉にテンゾウがそう返すと、まだ少し笑いの余韻を残したままカカシが言う。

「バカとは言っていないだろう。バカみたいに素直だ

って言ってるんだよ」

「それ、あんまり変わらないじゃないですか……」

テンゾウのため息交じりの言葉にカカシが微笑む。テンゾウはその柔らかな微笑みについて目を奪われる。

そりゃ男も惚れるよな……。

そう考えて、一瞬胸がひくつと締め付けられたように感じた。自分はどうしてこんなにカカシ先生の事が気になるのだろう。

こうして家まで無理やりに入り込んで。

「もう寝るか」

カカシはそう言ってリモコンで室内灯を全部消した。

第九章

クッションを枕に、カカシが貸してくれたタオルケットをかけて床にごろんと横になる。

真つ暗な室内はオーディオのデジタル表示だけが唯一の明かり。テンゾウも電気はすべて消す派なので暗さはちょうどいいのだが、カカシの家に来ていると思うとどうにも落ち着かず、中々寝付けなかった。

うつらうつらとしてはまたふつと目を覚ましたりしていた時、目は閉じていたがふと眩しさを感じた。

カカシの眠るベッドの方を見ると、月の角度がちょうど出窓の位置に移動し、月明かりが差し込んでくる。

カカシも目を覚ましたのだろう、起き上がり中途半端に開いたままだったカーテンを掴む。そのままカーテンを閉めるのかと思ったが、カカシは出窓部

分においた中学時代の写真盾を手に取った。差し込む月明りでその写真を眺めている。

やがて両膝を立て、腕を膝の上で交差させて置き、写真盾を握ったまま顔を埋めた。

まるで幼い子が膝を抱えて泣くように。

嘘…泣いてる…？

テンゾウは動けずに、ただ視線だけをカカシに向ける。

射し込む月明かりのシルエットの中、暫くカカシはそのままの姿勢だったが、声は一切出さなかった。

ただ静かに膝を抱えている。

どれ程の時間だったのか、おそらく数分だったのだろうが、カカシはやがて写真盾を戻した。

そしてベッドから起き出したので、テンゾウはぎゅっと目を閉じ眠っているふりをする。

カカシはテンゾウの横を通り洗面所に入った。ばしゃばしゃと小さな水音がして、カカシが顔を洗っ

ているのだとわかる。

起きる時間ではない。

やっぱり泣いていたのか…？

どうして…。

やがてカカシがベッドに戻り横になったのが、気配で分かった。

テンゾウはおそろおそろ目をあげ、カカシの方を見る。出窓のカーテンはカカシが閉めて、部屋は再び闇に包まれているので、よくは分からない。

自分はどうして高校生なのだろう。

テンゾウはふと思う。

涙の理由が分からなくても、気の利いた事でも言えればいいのに。

テンゾウはやるせない気持ちになる。しかしどうして泣いていたのか…？

頭の中はぐるぐると堂々巡りの思考を繰返し、やがて睡魔に引きずられた。

「おい、起きろよ」

遠くの声が近づく。

「起きろって」

ぺちつと頬を軽く叩かれてテンゾウは目を覚ます。

「うわっ」

カカシの顔が目の前に有り思わず声を発した。

「失礼な奴だな。人の顔見て」

「いや、びっくりして…」

「昨日はアイドル顔とか言ってたのに、化け物見た

みたいに驚くなよ」

「アイドル顔が目の前にあったからびっくりした

んですよ」

「おお、お世辞覚えたか高校生。褒美に朝飯やるよ。

食え」

ローテーブルの上にコンビニの袋に入ったサンドイッチとカフェオーレのペットボトルがある。

「お前は夏休みでも真面目な教師の俺は仕事があるんだよ。さっさと食って出てくれ」

朝のカカシは、いつものカカシだった。テンゾウの前だけで見せる、決して真面目な教師ではない口調のカカシ。

「先生って夏休み無いの？」

疑問に思ったことを口にする。

「お前らみたいに40日もない。夏期休暇は5日。今日行ったら、一応明日から土日と夏期休暇を足して1週間だけ休み」

「へー夏休みも仕事なんだ」

知らなかったので普通に驚いた。

「先生達ってはやつと明日から休みなのか…あつ！」

喋りながらオーディオラックの上の卓上カレンダーに目を寄せたテンゾウが大声を出す。

「何だよ、急に」

不意の大声にカカシが睨んだ。

「今日10日ですね。僕、誕生日です。8月10日」

「なんだ、そんな事で大声出すな、幼稚園児みたい」

驚かされた割に大したことなく、むすつとした態度でカカシが答える。

「これも何かの縁だから誕生日プレゼント下さい」

「はあ？何で俺が家に泊めた挙げ句朝御飯まで買ってきて、その上誕生日プレゼント渡さなきゃいけないんだ」

「モノじゃなくて携帯番号とラインのID教えて下さい」

カカシは一瞬黙り、すぐに言葉を繋げた。

「生徒と個人的やり取りしない。えこひいきと勘繰られる」

「前、チンピラに追いかけられた晩、写真削除するためだったけど、あっさり僕にスマホ貸してくれた

じゃないですか。その時、僕がラインID見ても良いような口振りだったのに」

「あの時は…もう教師は辞める気だったし」

「え？先生、辞めるの？」

テンゾウは心臓がどくつとする。

「あの時は、だよ」

いやもう…次から次へと驚かされて、混乱する。

「じゃ、今は辞めないんですね」

「今は、ね」

不知火との絡み、今の発言、そして深夜の涙…。

泣き顔を見たわけではないが、おそらく泣いていた。頭が混乱する、気持ちが振り回される。

一つ言える事は、カカシが教師を辞めたら、繋がりが無くなってしまうということ。カカシの考えは本当に掴めないけれど、このまま一学年だけの教師と生徒の関係で終わってしまうのは、それは…嫌だ。
「先生、えこひいきにならないように、メールで勉

強の質問とかしないから。だから教えてください」

「他の生徒に知れて次から次にライン届いても迷惑なんだよ」

「そんなことするわけじゃないです」

他の生徒に教えるわけがない。不知火先生と話すのさえ見ていて不愉快になったのに。

独占したいのに。

そうテンゾウは考えて、そしてそんな自分の気持ちに戸惑う。本当に自分はカカシの事をどう思っているのだろう。その気持ちの正体が何であれ、知りたいのだ、カカシの事なら何でも。

だから狡い手だって使う。

「不知火先生も知ってるんでしょう、カカシ先生の連絡先。仲良さそうでしたもんね。僕が今日5人の友達に二人が抱き合ってるのを見たってライン送ったら、1週間後には学校全体に知れ渡ってますよ。それが嘘かどうかは関係なく、高校生の情報力は半

端ないですから」

「一宿一飯の礼が脅迫か。素直な奴と思ってたのに、とんだ性質(たち)悪い奴泊めちゃったな」

カカシは苦笑いを浮かべる。

「僕は誕生日プレゼントが欲しいだけ」

「はいはい、分かった」

カカシはそれほど嫌がる風でもなく、スマホを取り出した。

第十章

遅刻するというカカシの言葉に急ぎ立てられて、テンゾウはそれから忙しくサンドイッチをかき込み、身支度を整えて一緒に部屋を出た。

部屋を出る時にちらと窓辺の写真に視線を合わす。

カカシはあの写真を見て泣いていたのだ、声も上げずに。

昨日見た時にも思ったが、若い一人暮らしの男が中学生の時の写真一枚だけ飾っているのもどこか不自然だ。写真そのものが趣味で、他にもたくさん飾っているというのならともかく。

分からないことが多い。ただ連絡先はゲット出来た。その事実だけは、テンゾウの気持ちを向上させる。

一緒に駅へと徒歩で向かう。歩きながら、カカシをちらと見る。

長い睫、整った鼻筋、赤い唇。歩く姿も様になるすらつと伸びた手足。毛先が微かに跳ねたみたいに見えるくせ毛、色白の肌。

通り過ぎる人がふと視線を投げかける、美しい人。

女子ならともかく、バスケやって体格もいい高3男子の帰りを心配して、結局家に泊めてくれた。

いい人なのは見せかけの仮面、実はいい加減なダメ教師と見せかけて、本当は優しいという複雑な人。

真夜中に涙する謎のある人。

不知火先生と、付き合っていないかもしれないが、おそらく同性同士の関係がある人。

駅に着き、テンゾウは駐輪場に置いていた自転車に乗り、塾には早いので一度家に戻る。

カカシは電車に乗って学校へと向かった。

家は駐輪場と駅の反対側になる。高架を抜けて振り返ると、時間的にカカシが乗ったのはこれだろうという電車が学校方向に向かって走っていく。

あの電車に乗っているのか、そう思うとほんの数分前まで一緒にいたのに、去りゆく電車が寂しいと感じた。

そして学校で不知火と会うのかと思うと、それだけで心が穏やかでいらなくなる。

もう分った。

自分はきつと、カカシ先生に恋している。

1年の時のバレンタインを思い出す。

その時チョコを持って来てくれた女子バスのあんこが、いつもより微かに背が高く感じて、ふと足をを見ると、軽く踵を上げてつま先立ちをしていた。

おそらく少しでも足が長く見える様に、少しでも自分に釣り合っただけに入られるように。

今なら分かる。

他にも何人かの女の子に告白されたけど、きつと前髪を気にして、スカートの長さを気にして、リップの色を気にして、勇気を振り絞って告白してくれ

たのだろう。人を好きになるというのは、そういう事なんだ。

あんことはしばらく付き合っただけで、結局それほど本気になれずに別れを告げた時、彼女は大泣きしていた。

今ならそんなに加減な気持ちで付き合わない。

きつとバージンだった彼女の事を思うと、別れを告げたことより、そもそも本気でもないのに付き合っていたセックスも要求したことがいかに酷いことだったかと自覚する。

自分の酷さを自覚出来たのは、自分がカカシに本気で恋をしたから。

数分前に分かれたことを寂しく思う程、人を好きになるのというのは、こんなにも切ない。

同性を好きだという葛藤は、カカシと不知火との関係を見て、逆にさほど感じなくなつた。

カカシが女性としか付き合えない人だったらも

つと悩んでいただろう。

しかし、不知火先生と同性の関係をもっているようなので、それは考えてみれば、同性の自分にもチャンスがあるという事。

ただ、カカシと釣り合うようになるには、やはり高校生では駄目だとテンゾウは思う。だから勉強に頑張ることにした。今までもそれなりに頑張ってきたが、明確な目標が出来たのだ。

大学に入り、社会人となりカカシと釣り合う立場になること。

カカシにラインを送ったりはしなかった。そもそもえこひいきになると嫌がっていたのだから、迷惑はかけられないという思いもある。

ただ、連絡先を個人的に知っているということは繋がりの一つだから、それが嬉しかった。

テンゾウのクラスは特進なので、他のクラスより数日夏休みが短く、夏期特別授業がある。

その前日に一度だけ、明日から授業お願いしますとだけ送った。

どうということも無い内容だが、ふと、カカシがIDを変えたりしていないか不安になったのだ。

即レスではなかったが、数時間後に”がんばれよ。でもこれからは返事はしないから”という返信をもたらった。

返事はしないということは仕方ないと思う。そもそも特定の生徒とだけ連絡取り合うというのは良くない事だろう。それよりIDを変えないでいくれたことが嬉しかった。それだけで本当に頑張れる気がした。

そしてカカシに会えることが、授業が始まる憂鬱さを超えて、喜びとなっている。

文化祭や、センター試験の申込みに合わせて志望校も絞りだしにかかるし、卒業写真の撮影、全国模試、受験を控えた高校生3年の秋は忙しい。

日々の忙しさに追われながら授業する姿、廊下で

すれ違ふとき、何かとカカシを意識してしまう。

家の最寄り駅が一緒なので、学校外でも会えないかとそれこそ毎日思っているが、そう思うと案外と会えない。

互いに受験生とはいえ高校の友人達との付き合いもあるし、塾もあるしでテンゾウとて、そうそう時間があるわけでもない。

偶然の出会いには結局なく、冬休みを迎えた。

第十一章

吐く息も白い12月、塾のセンター試験対策の模試があり、かなり早く家を出た。

自転車で駅に向かってしていると通り道にあるカカシのマンションから出てくる人影がある。まだ遠めだったが、英語科の不知火先生とすぐに分かった。カカシはいない。

時間ずらして出てくるんだろう。

怒り、不快、そして悲しみ、様々な負の感情がとぐろを巻く。付き合いがなくても、部屋には泊めるのか、それとも付き合いがないというのが嘘なのか。

テンゾウは自転車なのでどんどん近づく。ちょうどマンション横に差し掛かった時にカカシが出てきた。先に出た不知火はもうだいたいぶ前を歩いている。カカシの横で自転車を止める。テンゾウのブレーキ音でカカシが振り向く。

「…おはようカカシ先生」

「よう、おはよう」

自転車を降りて、横に並び歩きはじめる。

「冬休みも仕事？」

「前も言っただろ。生徒と同じ長期休みがあるわけじゃない」

「不知火先生泊まったの？」

「あつ、見つかったちゃった？」

カカシがふざけて返す。

テンゾウは怒鳴ってしまいそうな感情を抑えて、静かに聞いた。

「付き合っていないって、言ってたでしょう？」

「付き合っていない」

「でも、部屋には泊めたんだ」

「お前だって泊まったじゃないか」

「僕とは状況が違うでしょう。不知火先生の事は…」

前に会った時は…迷惑そうにしてたのに」

自分に都合が良いように考えたい心理も加味されて、カカシは不知火の事を避けていると思っていた。夏休みに出会った時には家に入れるつもりはないと、不知火に向かって言っていたのに。

「強引に来られると、面倒に思うときもある。付き合ってるわけじゃないから」

「付き合っていないのに、どうして家に泊めるんですか？」

カカシはどこか他人事のような軽い感じで、テンゾウに答えた。

「やつぱこどもだな、テンゾウ君。特定の相手がない時こそ、必要な関係ってやつだよ」

テンゾウの心は一層重くなる。

自分でも意外だったが、この重い気持ちは、嫉妬ではなかった。

『俺以外に特定の相手が出来たのか』

そうカカシに食って掛かっていた不知火が思い

出される。これは嫉妬ではない。ただ、悲しい。

「セフレって言う関係ですか？」

カカシが薄笑いを浮かべる。

「露骨な表現だこと、テンゾウ君」

テンゾウが歩を止めた。急に立ち止まったテンゾウをカカシが振り返る。

「それって…」

「何？」

「それって不知火先生も同じですか？」

「え？」

「不知火先生もカカシ先生と同じように、割り切って会ってるんですか？」

「それは…」

「カカシ先生はセフレと違ってても、不知火先生は違う、本気でカカシ先生の事が好きなんだと思います。」

カカシの表情に微かに怒気が含まれる。

「何でお前にそんな事がわかるんだ？」

睨むカカシにテンゾウが答える。

「僕も好きだから」

カカシが驚いてテンゾウを見つめる。

「僕もカカシ先生が好きです。だから、不知火先生の気持ちが変わる」

「お前何言って…ふざけた事言うなよ。俺は男だぞ」

「いつも僕に俺に惚れてるのか？って聞いてたじゃないですか。何でいまさら男ってことにこだわりますか」

「あれはお前をからかっただけ…そんな事わかるだろ。同性ってことにもうちよつと悩め」

「カカシ先生が同性に拘りがなければ、僕にもありません」

「いや、お前は拘れよ、将来考えろ、葛藤しろ」

「不知火先生との関係の方が悩みます」

「それは…」

「僕も本気だから」

きっぱり言い切るテンゾウをカカシは黙って見つめた。

「言うのは大学受かってからと思つてたけど、先生見てたら本気で好きつてことを言いたくなりました」

「俺を見て？」

「カカシ先生は不知火先生の気持ちを利用してると思います」

「そんなつもりは……」

「でも、実際そうなってる」

「……」

カカシは黙り込んだ。

「先生も自分を安売りしてる」

「安売りつて、そんなつもりは……」

「でも実際そうなってる」

カカシを諭すように同じ会話を繰り返す。テンゾ

ウはカカシに分かつて欲しかった。

誰かを本気で好きになるその切なさを今現在味わっているから、その気持ちを軽く扱うような事をやめて欲しかった。

「今の僕はまだまだ先生の相手にならないのは判つてます。だからきちんと大学行つて社会に出て、先生と対等な立場になることを目標にしてる。今日もセンターの模試で……つて、僕は早めに出てきたけど、先生は学校でしょ？時間大丈夫？」

「あ？やべっ！」

カカシは腕時計を見て慌てる。

「駅まで乗せますよ。乗つて」

カカシは素直に自転車の荷台にまたがりながら言う。

「二人乗りは禁止だろ」

「見つかつたら、先生に強要されたつて言います」

「え？ここで裏切るのか？たつた今、俺の事好きだ

って言ってたのに」

「僕は将来が大切なので。先生と対等にならなくちゃならないから」

テンゾウが自転車走らせる風に負けぬようやや大きめの声を出す。

「俺の将来はいいのか？」

「先生が仕事を失っても僕が養うから」

「あはは…そうくるか」

笑いながらカカシがテンゾウの背中に頭をつける。途端に背中がかつと熱く感じた。

試験頑張ろう。自分のために。カカシへの告白が本気だと信じてもらうために。

背中にカカシの気配を感じて動悸がする心を落ち着けるように、テンゾウはペダルを踏み込んだ。

その夜、カカシに一行だけのラインを送った。

『朝言ったこと、僕は本気です』

返事はなかった。以前にも返信はしないと云われ

て、実際テンゾウが何かメッセージを送っても既読になるだけで返信はいつもない。元々生徒と個人的なやり取りはしないと言っていたので仕方ないと思う。

でもさすがに告白後なので、返信がないことに多少落ち込みはした。でも、告白がフライングだったのだ。とにかく今は目の前の試験に頑張ることだと思ふ。

年が明けて1月、センター試験の前日。

カカシの方から初めてラインが届く。

『明日、頑張れ』

余りの嬉しさに舞い上がって画面を見ている時に、もう一つメッセージが届いた。

『不知火先生と個人的に会うことはもうしない』

心臓がマンガみたいに皮膚を押しながら前に飛び出すんじゃないかと思うくらいどきつとした。

不知火先生と個人的に会わない、その言葉を真に

理解するのに多少の時間がかかったが、ようやく飲み込む。

不知火はカカシに執着していたから、会わないというのはカカシの意思。そしてそれを自分に教えてくれた、その喜びが寒い冬でも穏やかな温もりをもたらす陽射しのように、じんわりとテンゾウを包んでいた。

翌2月、テンゾウは高校を卒業し、3月には第一志望の国立大学に合格した。